藤原定家自筆『拾遺愚草』における和語表記の漢字

――使用頻度に着目して――

村田正英

目次

一　はじめに
二　『拾遺愚草』の構成と成立
三　『拾遺愚草』における和語表記の漢字の字種
四　定家自筆『奥入』『嘉禄本古今和歌集』との字種の比較ならびに検討
五　使用頻度から見た『拾遺愚草』『奥入』の和語表記の漢字
六　まとめ

一　はじめに

筆者はこれまで、藤原定家自筆の平仮名文を中心に、そこに現れる和語表記の漢字とその訓とを取りあげて整理をしてきた。それは、資料として量も多く素姓も確かなこれらの資料を調査し、それを土台にして、平仮名文における漢字と訓との関係についてその社会的広がりあるいは資料的変異を明らかにしてゆこうとしているからである。

筆者はその一環として、かつて定家自筆の『近代秀歌』『奥入』『伊達本古今和歌集』と、定家の父藤原俊成自筆の『古

来風躰抄』との比較を試み、その結果として次のことを指摘した。(1)

いま改めてまとめると、

I　各資料に見出せる漢字は、それぞれ特定の一和訓と対応しており、一字多訓、同訓異字のような例は極めてまれである。

II　定家自筆の三資料に較べ、『古来風躰抄』は、使用された漢字の字種が少なく、また使用頻度も目立って低い。さらに次のことも指摘した。

III　『伊達本古今和歌集』は他の資料に較べ、漢字の字種が多く、また使用頻度も著しく高い。これは当該資料が一首の和歌を一行におさめようとしていたためであろう。

以上のようなことを述べた。

しかし、これらの結論をより確かなものにするためにも、さらに多くの定家自筆資料の調査が必要であると考える。本稿では、まず藤原定家自筆の『拾遺愚草』に見られる和語表記の漢字を、同じく定家自筆の『奥入』『嘉禄本古今和歌集』と比較し、その字種の数や延べ字数の違いから、『拾遺愚草』が『嘉禄本古今和歌集』よりも『奥入』に近い様相を示していることを述べ、次いで『拾遺愚草』（上巻）と『奥入』における漢字の使用頻度から、定家頻用の漢字の存在を指摘し、その意味するところを考えようとした。

対象を和歌部分の表記に限ったのは、詞書などでは、文中の漢字の訓についてその決定に明確な根拠を見出すことがむずかしい場合もあると考えたからである。

二　『拾遺愚草』の構成と成立

つぎに『拾遺愚草』の構成と成立について、今回の調査のテキストとして用いた『冷泉家時雨亭叢書　拾遺愚草　上

中』所収の久保田淳氏の解題に拠って示しておく。

○藤原定家自撰家集『拾遺愚草』の構成

上・中・下の正篇三巻およびその外篇ともいうべき『拾遺愚草員外』とから成る。

上巻は養和元年（一一八一）四月、定家二十歳の時の「初学百首」歌に始まる百首歌が集められ、中巻はその他の定数歌、そして下巻には春夏秋冬などに分けられた部類歌が収められている。三巻の総歌数は二八八五首。

『員外』は右に収まらなかった定数歌等をひとまとめにしたもの。歌数八六九首。

○同集の成立

上巻に建保四年（一二一六）三月十八日の識語があり（時雨亭叢書、上一七八丁裏）、この時点で一応の形は出来上がっていたものと思われる。しかしこの識語のあとに貞永元年（一二三二）四月の「関白左大臣家百首」が附載されており、また下巻にも「貞永元年七月大殿哥合恋十首」が見えている（同叢書、下八一丁表）ことから、貞永元年の頃に再度編集が行われたと考えられる。なお下巻一四三丁裏には、「遁世のよしきゝて家長朝臣」に始まる四首の贈答歌があり、これらは天福元年（一二三三）十月十一日の定家出家以後に交わされたものと考えられるが、それ以前の部分とは筆致がやや異なっており、後からの書き足しかと疑われる。

『員外』の成立も正篇とほぼ同時期と推測される。

テキストとして用いた『冷泉家時雨亭叢書　拾遺愚草』正篇は藤原定家の自筆。『員外』は室町時代末期の書写か。なお、下巻の五六丁表の「はつゆきの」の歌の直後に「あともなし」の一首を欠いており、また所々に貼り紙を用いての他の手による和歌の書き入れも見られるので、それら二九首を除いた正編の二八五六首（上巻　一五〇〇首、中巻五二五首、下巻八三一首）を今回の調査の対象とした。和歌は、後の書き込みの例を除き、上の句、下の句が二行に分けて

記されている。

三　『拾遺愚草』における和語表記の漢字の字種

次に、『拾遺愚草』において用いられた和語表記の漢字をその訓の五十音順に列挙する（地名など固有名詞も含む）。なお、この表については、次のような配慮をした。

1　『拾遺愚草』における和語表記の漢字を、単字に分解し、それぞれの訓の品詞によって、「名詞」「動詞」「形容詞など（形容動詞語幹をも含む）」「副詞など（連体詞・接続詞をも含む）」「助詞など（助動詞、接尾語、用言の活用語尾などをも含む）」に大別し、それぞれ訓の五十音順に配列した。

2　『拾遺愚草』巻中冒頭の「韻哥百二十八首」中の韻字一二八字は、非日常的な漢字も多いと考えて、この表からは除外した。

3　「菊（きく）」は和語ではないが、和歌にたびたび用いられており、また「白菊」のように和語と熟合した例も見られるので、ここに挙げた。

4　「時雨（しぐれ）」「五月雨（さみだれ）」などの熟字訓、「葦引（あしひき）」「久方（ひさかた）」などの枕詞、また「相坂（あふさか）」「秋津（あきつ）」などの地名に関するもの、さらに「千鳥（ちどり）」「山吹（やまぶき）」などの動植物名は、単字に分解することを敢えてしなかった。ただし、「よし野」「山ぶき」のような例は、「野」あるいは「山」の項目に含めた。

5　「卯花（うのはな）」「世中（よのなか）」は「卯」と「花」、「世」と「中」に分割して掲げた。

〔名詞〕

あかつき（暁）・あき（秋）・あきつ（秋津）・あし（葦）・あづさ（梓）・あと（跡）・あはぢ（淡路）・あふぎ（扇）・あふさか（相坂・會坂）・あふひ（葵）・あまのがは（天河）・あめ（雨）・あらし（嵐）・ありあけ（晨明・在明）・いけ（池）・いち（市）・いづみ（泉）・いと（絲）・いはしみづ（石清水）・いはゐ（石井）・いへ（家）・いま（今）・いろ（色）・う（卯）・うし（牛）・うち（内）・うぢ（宇治）・うみ（海）・うら（浦）・え（江）・えだ（枝）・おほとも（大伴）・おほゐ（大井）・かがみ（鏡）・かげ（影）・かけはし（梯）・かささぎ（鵲）・かすが（春日）・かすみ（霞）・かぜ（風）・かた（方）・かた（片）・かつら（桂）・かど（門）・かは（河）・かみ（神）・かみなづき（十月）・から（唐）・き（木）・きく（菊）・きし（岸）・きた（北）・きのふ（昨日）・きみ（君）・くさ（草）・くしげ（匣）・くも（雲）・くれなゐ（紅）・けぶり（煙）・こ（子）・こ（木）・こがらし（木枯）・こけ（苔）・ここち（心地・心ち）・こころ（心）・こと（事）・ことば（詞）・ころも（衣）・こゑ（聲）・さか（坂）・さが（嵯峨）・さくら（櫻）・さざなみ（篠波）・さつき（五月）・さと（里）・さみだれ（五月雨）・しか（鹿）・しぐれ（時雨）・しま（嶋）・しも（霜）・しらかは（白河）・しろたへ（白妙）・すみよし（住吉）・せき（關）・そで（袖）・た（田）・たかさご（高砂）・たけ（竹）・たちばな（橘）・たつた（龍田）・たに（谷）・たび（旅）・たま（玉）・たまほこ（玉桙）・たみ（民）・ち（千）・ちどり（千鳥）・つき（月）・つばさ（翅）・つゆ（露）・て（手）・と（戸）・とき（時）・とこ（床）・ところ（所）・とし（年）・となり（隣）・とも（友）・ともしび（燈）・とり（鳥）・な（名）・なか（中）・ながつき（長月）・なかば（半）・なつ（夏）・なみ（浪・波）・なみだ（涙）・にし（西）・にしき（錦）・には（庭）・ねのび（子日）・の（野）・のり（法）・は（葉）・はぎ（萩）・はし（橋）・はな（花）・はま（濱）・はやし（林）・はら（原）・はる（春）・ひ（日）・ひ（火）・ひさかた（久方）・ひと（人）・ひめ（姫）・ふかくさ（深草）・ふきあげ（吹上）・ふしみ（伏見）・ふぢ（藤）・ふね（舟）・ふゆ（冬）・ふるさと（故郷）・べ（邊）・ほたる（螢）・ほととぎす（郭公）・まくら（枕）・まつ（松）・み（三）・み（身）・みち（道）・みつ（御津・三津）・みづ（水）・みづうみ（湖）・みどり（緑）・みなみ（南）・みね（峯）・みや（宮）・むかし（昔）・むさし（武蔵）・むし（虫）・むめ（梅）・むらさき（紫）・もと（本）・もの（物）・

もみぢ（紅葉）・や（屋）・やなぎ（柳）・やま（山）・やまぶき（山吹）・ゆき（雪）・ゆふべ（夕）・ゆみ（弓）・ゆめ（夢）・よ（世・代）・よ（夜）・よしの（吉野）・よつ（四）・よもすがら（終夜）・よろづ（万）・われ（我）・ゐ（井）・を（緒）・をぎ（荻）・をぐら（小倉）……以上一九〇種。

〔動詞〕（語形は連用形で示す）

あり（有）・いとひ（厭）・いり（入）・うち（打）・うらみ（怨）・おい（老）・おもひ（思）・かぎり（限）・かへし（返）・かへり（歸）・かり（狩）・こひ（戀）・こほり（氷）・しのび（忍）・すみ（住）・ちぎり（契）・なげき（歎）・はじめ（始）・ふき（吹）・み（見）・みえ（見）・みせ（見）・わかれ（別）・わたし（渡）・わたり（渡）・をり（折）……以上二六種。

〔形容詞など〕

あさし（浅）・おほ（大）・かなし（悲）・しら（白）・ふかし（深）……以上五種。

〔副詞など〕

いかに（如何）・なほ（猶）・また（又）……以上三種。

〔助詞など〕

かな（哉）・がな（哉）・なり（也）・ばかり（許）・らむ（覧）……以上五種。

以上、合計二二九種が、『拾遺愚草』に認められる和語表記の漢字である。

さて、右の中に見られる同訓異字等についての検討は、紙面の都合上、別稿にゆずることとするが、「會坂・相坂」、「晨明・在明」など若干の例を除き、ほとんどの漢字はそれぞれ一つの訓との一対一の対応を示している。

四　定家自筆『奥入』『嘉禄本古今和歌集』との字種の比較ならびに検討

次に、同じく定家自筆の『奥入』ならびに『嘉禄本古今和歌集』について、そこに用いられた和語表記の漢字字種を

掲げる（傍線を付したものは、『拾遺愚草』を含めた三資料のうち当該資料にのみ見られる字種である）。

○『大橋家蔵　奥入』……嘉禄元年（一二二五）定家六四歳の頃の書写か。テキストは『定家自筆本　奥入』（日本古典文学会覆製）。三六〇首。

〔名詞〕秋・朝（あした）・相坂・池・伊勢・家・今・伊豫・色・宇治・上（うは）・浦・江・枝・垣・影・風・方・片岡・門・河・神・鴈・木・君・霧・草・雲・紅・煙・子・心地（「心ち」を含む）・心・事・衣・櫻・里・棹・下（した）・嶋・白妙・袖・袖振・手（た）・橘・玉・玉津・誰・千・塵・月・罪・露・時・所・年・鳥・名・中・夏・浪・涙・葉・花・春・日・久方・人・舟・冬・外・郭公・枕・松・身・道・水・峯・宮・昔・虫・馬・午（むま）・梅・物・柳・山・山吹・雪・夕・夢・世・夜（よ）・吉野・我・井・荻……以上九七種。

〔動詞〕有・入・打・怨・思・返（かへし）・歸・思・過・染・立・問・吹・申・巻・迷・見・見え・見せ・行・忘・渡（わたし）……以上二二種。

〔形容詞など〕大・悲・白（しら）・深・若……以上五種。

〔副詞など〕猶・又……以上二種。

〔助詞など〕哉・哉（がな）・也・許・覧……以上五種。以上合計一三一種。

○『嘉禄本古今和歌集』……嘉禄二年（一二二六）定家六五歳の書写。テキストは『冷泉家時雨亭叢書　古今和歌集嘉禄二年本』（朝日新聞社刊　影印本）。一一一一首。

〔名詞〕暁・秋・朝（あさ）・朝（あした）・葦引・梓・跡・相坂・天・漢河・天河・雨・綾・嵐・荒玉・霰・泡・池・伊勢・礒・泉・絲・巌・家・今・色・卯・鶯・内・宇治・空蟬・海・浦・江・枝・奥・帯・大井・鏡・篝・影・笠・春日・霞・風・方・桂・門・河・河原・神・神無月・龜・唐・鴈・鴈金・木・菊・岸・北・昨日・君・霧・蚕・草・匣・

雲・紅・煙・小・苔・心地（「心ち」を含む）・心・事・駒・今夜（こよひ）・衣・聲・坂・櫻・五月・里・早苗・五月雨・鹿・時雨・嶋・霜・白河・白妙・住吉（すみのえ）・住吉（すみよし）・末・關・蟬・底・袖・田・高砂・瀧・竹・橘・龍田・織女・谷・旅・玉・玉津・玉桙・為・誰・千・千年・千鳥・月・常・露・列（つら）・鶴・手・時・所・年・隣・友・鳥・名・中・夏・何・浪・波・涙・西・錦・庭・布・野・後（のち）・葉・萩・橋・初（はつ）・花・濱・原・春・日・火・久方。一（ひと）・人・獨（ひとり）・姫・深草・伏見・藤・舟・冬・故郷・邊・外（ほか）・螢・程・郭公・時・鳥・枕・松・身・道・水・緑・峯・美作・耳・宮・都・昔・虫・梅・紫・本・物・紅葉・社・柳・山・山吹・雪・夕・弓・夢・世・夜（よ）・吉野・芳野・夜（よる）・渡津海・我・尾・緒・女郎花……以上二〇二種。

〔動詞〕曙・逢・有・在・出・入・打・怨・栽・老・置・思・限・隠・返（かへし）・返（かへり）・歸・枯・超・戀・氷・定・忍・知・過・住・染・立・尋・契・釣・問・泊・取・流・鳴・成・匂・残・始・吹・申・待・迷・招・見・見え・見せ・結・廻・守・行・別・忘・渡（わたし）・渡（わたり）・惜・折……以上五八種。

〔形容詞など〕浅・大・悲・暗・寒・白（しら）・涼・高・長・早・深・舊・若……以上一三種。

〔副詞など〕更に・猶・又……以上三種。

〔助詞など〕哉・哉（がな）・釼・霜・鶴・南・也・許・覧……以上九種。以上合計二八五種。

以上の通りである。

ここに見られる漢字字種について『拾遺愚草』と照合するに、それぞれの資料内では、「同訓異字」の例や、一漢字が二様の訓を有する「一字二訓」の例などが若干存在するものの、資料間で同一字に対する訓が対立している例は、ほとんど無いと言ってよい。これについても稿を改めて論じたい。

さて、『奥入』『嘉禄本古今和歌集』『拾遺愚草』の三資料における漢字字種の量を相互に比較した結果次のような数値

が得られた。なお、以下特に断らない限り、『嘉禄本古今和歌集』は「古今集」、『拾遺愚草』は「愚草」と略称する。

《表一》―三資料間の字種ならびに延べ字数の量的比較―

	歌数	当該資料にのみ存する字種	奥入とのみ共通する字種	古今とのみ共通する字種	愚草とのみ共通する字種	三資料全てに共通する字種	字種の合計	延べ字数	一首当たりの平均漢字数
奥入	三六〇首	一三種	○	一六種	三種	九九種	一三一種	八二七字	二・三〇字
古今	一一一一首	九二種	一六種	○	七八種	九九種	二八五種	四三八二字	三・九四字
愚草	二八五六首	四九種	三種	七八種	○	九九種	二二九種	七三三九字	二・五七字

まず、各資料の漢字字種の合計を見るに、『古今集』が二八五種と最も多く、その二倍以上の歌を有する『愚草』の方がむしろ少ないのであって、収める歌の数には必ずしも比例していない。また『古今集』では、「延べ字数」を「歌数」で割った「一首当たりの平均漢字数」もおよそ三・九字であり、『奥入』『愚草』が一首あたりおよそ二・三字〜二・五字であるのと較べ、際だって多いことが知られる。これは、『古今集』が、前稿で扱った『伊達本古今集』と同様に、歌一首を一行に記しており、『伊達本』同様、歌を一行に納めるために漢字を多用したためではないかと考えられる。

これに対して、『愚草』の一首あたりの平均漢字数は、『奥入』に近い数値を示している。また、この表には含めなかったが、同じく定家自筆の『近代秀歌』における一首当たりの平均漢字数も約二・五字であって、『近代秀歌』を含めたこの三資料が、和歌の表記における漢字の交用の度合いにおいてほぼ等しい状況を呈していることがわかる。そのことは、これら三資料がいずれも原則として歌の上下二句を二行に分けて記していることと無関係ではあるまい。

次に、資料間での字種の一致度を見るに、『奥入』『愚草』ともに『古今集』との一致度の方が高く、『古今集』においては『愚草』との一致度が高いことが見てとれる。すなわち、いずれの場合も字種の数が多い方と一致する程度が高い

ということになる。

また、当該資料にのみ見られる漢字を見ると、ここでも『古今集』が九二種と最も多く、次いで『愚草』の四九種、『奥入』が一三種となっており、全体の字種の量が多い資料ほど、それにのみ見られる字種も多くなっている。

ところで、ある漢字がその資料に見られないといっても、そもそも、その漢字の表す語がその資料に用いられていなければ漢字自体も現れるはずがないであろうから、その点について少し調べをすすめてみる。

『奥入』にのみ見られる字種一三種の中で、他の二資料には出現しない語を表す漢字は「伊豫」「罪」の二種である。

『古今集』の九二種の中で、その語が他の二資料に出現しないものは「早苗」「美作」「耳」「尾」「栽」「招」「暗」「舊」の八種である。

次に、『拾遺愚草』では、四九種のうち、「秋津」「扇」「市」「石井」「牛」「大伴」「梯」「鵲」「木枯」「詞」「嵯峨」「篠波」「民」「翅」「燈」「長月」「子日」「法」「三」「湖」「南」「四」の二二種である。

こうして、他の資料にも見出せる語で『愚草』にのみ用いられた漢字は実質的には二七種となり『古今集』の八四種に較べてかなり少ないことが明らかとなる。『奥入』の一一種に較べれば多いと言わなければならないが、『奥入』の約八倍の歌を納める『愚草』において一首平均二・五字の漢字を交えて記す時、漢字が用いられる機会は『奥入』よりも多かったであろうから、この差は当然のことと考える。

以上のように考えると、『愚草』は一首当たりの漢字の使用度ならびに独自の漢字字種の量などからみて、『奥入』に近い様相を示していると言えよう。

『奥入』が、もともと『源氏物語』写本の巻末に記した定家の注記を切り取ったものだとすれば、そこには定家の平仮名文における普段の文字遣いがあらわれていると考えることが出来る。そして定家自作の和歌をまとめた『愚草』が『奥入』と相似た様相を示すことは、『愚草』にも、定家の普段の文字遣いが見えていると考えてよいのではあるまいか。

五　使用頻度から見た『拾遺愚草』『奥入』の和語表記の漢字

さて、右に掲げた三資料にそれぞれ使用された漢字は、総体として、平仮名文における藤原定家の書記用漢字の体系に含まれると考えるべきものであろうが、たとえば《表一》の中で、その「資料にのみ存する字種」と「三資料全てに共通する字種」とでは、何か違いがあるのであろうか。

そこで、今これらの漢字の使用頻度（使用回数）について『愚草』さらに『奥入』を調べた結果を次に掲げる。各漢字の下の数字は当該資料における使用頻度を示す。ただし、『愚草』は上巻一五〇〇首の調査結果のみを提示する。①は当該資料にのみ見出せる字種、②は他の二資料のうちのどちらかとだけ共通する字種、③は三資料共通に見出せる字種とする。漢数字は字種の数を示す。

『拾遺愚草』（上巻）

①『愚草』にのみ見られるもの……二九種

〔名詞〕秋津2・葦1・扇1・晨明2・市1・石清水1・大伴1・梯1・片1・木（こ）1・木枯1・民1・戸3・床1・燈1・長月3・法2・吹上1・三10・御津1・南1・屋1・代1・四1・終夜5・万1……以上二六種。

〔動詞〕狩1・歎1……以上二種。

〔副詞など〕如何13……以上一種。

〔形容詞など〕〔助詞など〕……該当ナシ。

②『奥入』または『嘉禄本古今集』にも見られるもの……六五種

〔名詞〕暁4・梓2・雨10・嵐4・泉3・絲1・卯3・内8・海5・大井2・鏡1・春日1・霞26・桂1・唐2・菊5・岸1・北1・昨日2・匣1・聲8・五月1・五月雨7・時雨8・霜9・住吉（すみよし）1・關3・田12・高

砂1・竹14・龍田3・谷4・玉桙1・千鳥5・手18・友3・波11・錦1・庭29・野21・萩1・橋1・濱1・原3・火12・姫1・深草2・伏見1・邊8・螢1・緑1・紫1・本3・紅葉11・弓2・〈以上『古今集』と共通〉・井4・荻4〈以上『奥入』と共通〉……以上五七種。

〔動詞〕限1・氷8・忍2・住1・契1・別3・渡（わたり）3〈以上『古今集』と共通〉……以上七種。

〔形容詞など〕浅1〈『古今集』と共通〉……以上一種。

〔副詞など〕〔助詞など〕……該当ナシ。

③『奥入』『古今集』両者にも見られるもの……八九種

〔名詞〕秋238・相坂1・池13・今23・色67・宇治4・浦3・江9・枝3・影17・風154・方22・河59・神26・木（き）29・君5・草40・雲19・紅2・心地（「心ち」を含む）9・心127・事2・衣54・櫻13・里1・嶋1・白妙3・袖41・橘5・玉4・千3・月241・露15・時25・年34・鳥7・名22・中13・夏24・浪60・涙8・葉21・花186・春41・日56・久方3・人144・舟12・冬26・郭公16・枕21・松59・身69・道8・水38・峯31・宮10・昔9・虫6・梅8・物26・柳4・山290・山吹1・雪56・夢19・世88・夜（よ）64・吉野1・我13……以上七〇種。

〔動詞〕入2・打1・怨2・思75・歸1・戀1・吹6・見140・見え58・見せ19・渡（わたし）1……以上一一種。

〔形容詞など〕白（しら）16……以上一種。

〔副詞など〕猶46・又27……以上二種。

〔助詞など〕哉155・哉（がな）10・也1・許29・覧8……以上五種。

『奥入』

①『奥入』にのみ見られるもの……一三種

〔名詞〕伊豫1・上（うは）1・垣1・片岡1・棹1・袖振1・手（た）1・塵1・罪1・馬1・午（むま）1

〔動詞〕巻1……以上一種。
〔形容詞など〕〔副詞など〕〔助詞など〕……該当ナシ。
……以上一二種。

②『愚草』（これは全巻）または『古今集』にも見られるもの……一九種
〔名詞〕朝（あした）1・伊勢2・鴈2・霧2・玉津1・誰2・外（ほか）1〈以上『古今集』と共通〉・子1・井4・荻1〈以上『愚草』と共通〉……以上一〇種。
〔動詞〕過1・染1・立1・問2・申1・迷（まどひ）6・行3・忘1〈以上『古今集』と共通〉……以上八種。
〔形容詞など〕若1〈『古今集』と共通〉……以上一種。
〔副詞など〕〔助詞など〕……該当ナシ。

③『愚草』（ここでは全巻）『古今集』両者にも見られるもの……九九種
〔名詞〕秋19・相坂1・池2・家2・今6・色4・宇治1・浦3・江3・枝1・影2・風12・方6・門1・河9・神13・木4・君8・草9・雲4・紅2・煙1・心地（「心ち」を含む）4・心25・事17・衣9・櫻3・里1・嶋2・白妙1・袖8・橘1・玉1・千1・月18・露2・時8・所3・年2・鳥2・名4・中22・夏6・浪6・涙1・葉1・花36・春17・日7・久方1・人75・舟3・冬2・郭公2・枕3・松8・身34・道8・水8・峯3・宮2・昔3・虫1・梅7・物42・柳1・山39・山吹1・雪1・夕3・夢6・世38・夜15・吉野1・我14……以上七五種。
〔動詞〕有1・入3・打2・怨1・思53・返（かへし）1・歸1・戀3・吹2・見35・見え14・見せ2・渡1
……以上一三種。
〔形容詞など〕大2・悲1・白5・深4……以上四種。
〔副詞など〕猶3・又5……以上二種。

〔助詞など〕哉10・哉（がな）7・也1・許10・覧4……以上五種。

以上の結果をもとに、各資料の漢字について、その使用頻度による①～③の項目ごとの分布を表にすると次のようになる。

《表二》―『拾遺愚草』（上巻）における漢字使用頻度の分布―

	使用頻度	二〇〇回以上	一九九～一〇〇	九九～五〇	四九～二〇	一九～一〇	九～二	一	合計
①		○	○	○	○	二	六	二一	二九種
②		○	○	○	三	七	三一	二四	六五種
③		三	六	一二	二〇	一四	二四	一〇	八九種

《表三》―『奥入』における漢字使用頻度の分布―

	使用頻度	五〇回以上	四九～二〇	一九～一五	一四～一〇	九～五	四～二	一	合計
①		○	○	○	○	○	○	一三	一三種
②		○	○	○	○	一	七	一一	一九種
③		二	八	五	六	一九	三四	二五	九九種

この表から次の事柄が見てとれる。

1　個々の資料においてその使用頻度の高い漢字は、すべて三資料に共通して見出せる漢字（すなわち③）である。

2　その資料にのみ見られる漢字は、その多くが使用頻度の低いものである。

ところで、先のリストにしたがい、『愚草』ならびに『奥入』において使用頻度の高位のもの（『愚草』五〇以上、『奥入』一〇以上）を取り出すと、次のようになる。

『愚草』秋・色・風・河・心・衣・月・浪・花・日・人・松・身・山・雪・世・夜・思・見・見え・哉（かな）……以上二一種。

『奥入』秋・風・神・心・事・月・中・花・春・人・身・物・山・世・夜・我・思・見・見え・哉・許（ばかり）……以上二一種。

右のうち、双方に見出せる字種は一四種（傍線を付したもの）で、これらは定家筆の『近代秀歌』『更級日記』『土左日記』にも共通して見出せる漢字である。

また、両資料の漢字について、その語の全用例数に対する漢字使用頻度（これを仮に「漢字使用率」と呼ぶ）を算出し、語の用例が一〇例以上あり、かつ漢字使用率七〇％以上のものを挙げると、次の通りである（語の用例数を限ったのは、語の用例自体が少ないと、漢字使用頻度がわずかでも使用率が高率になることもあるので、そこに不安定さを認め、しばらく排除したのである）。

『愚草』秋・池・江・風・河・神・心・衣・田・竹・月・時・年・夏・庭・舟・冬・花・日・火・人・松・三・身・水・峯・山・見・見え・見せ・猶・又・哉・哉（がな）……以上三三種。

『奥入』秋・風・神・心・月・中・花・春・人・身・道・物・山・世・夜・見・見え・許……以上一八種。

これを見るに、先の『愚草』『奥入』の漢字使用頻度高位のものそれぞれ二一種のうち、『愚草』においては一五種、『奥入』においては一七種がここに見出せる結果となる。

すなわち、定家自筆三資料に共通する漢字には、使用頻度の高い漢字が多く含まれ、しかもそれらの語の多くが、仮名よりも漢字を多く用いる可能性の高いものであったことが判明するのである。

さて、これら定家における「頻用漢字」とでも呼ぶべきものは、果たして定家一人に見られる事柄なのであろうか。平安期の古筆切などを見ると、漢字を交えず平仮名のみで記されたものもある中で、『寸松庵色紙』(伝貫之筆)には「秋」「花」「人」「道」「山」「我（われ）」、『継色紙』(伝小野東風筆）には「風」「神」「月」「花」「日」「人」「水」「松」「山」などが見えている。また、院政期の『源氏物語絵巻』には「秋」「朝臣」「風」「心ち」「心」「事」「月」「露」「殿」「花」「人」「仏」「身」「右」「宮」「物」「紅葉」「山」「我」「女」「思」「給」「侍」「申」「見」が見えており、定家の「頻用漢字」と共通するものが少なくない。平安時代平仮名文の中に早くから持ち込まれた漢字があったのではないか。そしてそれらは定家においては、むしろ漢字表記が当然ともいうべきものになっていたのではないか。今は、そのように考えている。

六　まとめ

これまで述べてきたことを、まとめると次のようになろう。

定家自筆の『拾遺愚草』『奥入』『嘉禄本古今集』を相互に比較した結果、

I　歌一首当たりの漢字使用度、また各資料独自の漢字字種の多さから、『古今集』が特に漢字を多用していることが確かめられた。

II　『拾遺愚草』と『奥入』は一首当たりの平均漢字数もほぼ等しく、資料独自の漢字字種もさほど多くなく、互いに相似た様相を示している。両資料は、平仮名文における定家の日常的な文字遣いに近いものを示していると考えられる。

さらに、『拾遺愚草』（上巻）と『奥入』について、その使用字種を使用頻度の点から分析した結果、

III　それぞれの資料において使用頻度の高い漢字は、すべて『古今集』を含めた三資料に共通して見出せる漢字であ

る。

Ⅳ　各資料において、それにしか見えない独自の漢字は、そもそもの使用頻度が低いものがほとんどである。

Ⅴ　『拾遺愚草』『奥入』において使用頻度の高い漢字は、その多くが漢字使用率においても高率を示すものであり、しかもそれらは、定家自筆の他の資料にも共通して見出せる漢字である。

注

（1）　拙稿「冷泉家時雨亭文庫蔵『古来風躰抄』における和語表記の漢字――藤原定家自筆平仮名文との比較――」（『鎌倉時代語研究』第十八輯）

［後記］　本稿は、鎌倉時代語研究会における一九九七年から一九九九年へかけての発表に基づくものである。その間、それぞれの発表において、小林芳規先生はじめ多くの会員諸氏より有益な御助言や御示唆をいただいた。この紙面を借りて、御礼を申し上げる。なお特に小林先生には、つねに温かい励ましのお言葉があり、この拙い文章も、そのお言葉を力としてのものであった。あえて記して感謝の気持ちの一端を表したい。（二〇〇〇・一・二九）